



筑紫女学園大学リポジト

焼跡の「少年」とは何者か：
石川淳「焼跡のイエス」論

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永淵, 道彦, NAGAFUCHI, Michihiko メールアドレス: 所属: |
| URL | https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/740 |

焼跡の「少年」とは何者か

—— 石川 淳 「焼跡のイエス」論 ——

永 淵 道 彦

A Study of ISIKAWA-Jun's "Yakeato No Iesu"

Michihiko NAGAFUCHI

はじめに

昭和二十一、二年の、すなわち敗戦後の石川淳の創作活動について、野口武彦の正鵠を得た言説がある。「敗戦後の創作活動は、短編『黄金伝説』（『中央公論』昭二十一・三）の発表から開始され、やがてすぐこの作家が江戸文学から得た 見立て の趣向を小説方法として駆使することで展開される一連の主題圏を持った小説群にうつがれる。この時期の石川淳は 新戯作派 の名をもってジャーナリズムに遇されるが、そのじつここに展開される作品世界は、聖書伝説のイメージを戦後風俗に重ね合わせる技法を通じて、既存の価値やモラルが全面的に崩壊し、あらゆる秩序の確立されていないいわば創世紀的混沌の状態にある戦後社会に、人間の魂の原質を探ろうとする主題的等質性を持っている」（『日本近代文学大事典・第一巻』）と。

戦災浮浪児にイエスの示現をみる、石川淳の秀作「焼跡のイエス」(『新潮』昭和二十一・一〇)は周知のことであるが、ここで言説される「聖書伝説のイメージを戦後風俗に重ね合わせる技法を通じて」書かれた一連の作品群の代表作である。ところで、この「焼跡のイエス」には野口武彦・井澤義雄らの論及があるものの、抽象的な言説に終始し、作品の読みの具体性に欠くと言わざるを得ない。また、山口俊男「石川淳『焼跡のイエス』論——語り手『わたし』を編集する 作者——」(『国語と国文学』平成十二・五)等には「イエス」像の見立てへの具体的な論及があるものの、「キリスト教の《意匠》の活用に《必然性》を感じられるかどうか」にウエイトを置いたものであり、戦災浮浪児である「少年」を正面から取り上げたものではない。

そこで初心にかえり、石川淳の秀作「焼跡のイエス」を読み解く手始めとして、本稿では、作中の中心人物である、イエスを示現する焼跡の戦災浮浪児である「少年」に焦点を当て考察することにした。イエスに「見立てられ作中に描かれる焼跡の「少年」像とはどのようなものであり、焼跡の「少年」とは何者なのかと。

「焼跡のイエス」の構成は大きく、作品主要部分の前半部分、後半部分、並びにその後日譚と区分することができる。すなわち、昭和二十一年七月三十一日の「上野のガード下」の闇市での出来事の部分、闇市を脱出した話者の「わたし」が戦災浮浪児に襲われる部分、並びに予告通り閉鎖された翌八月一日の闇市の後日譚の部分である。

焼跡の戦災浮浪児である「少年」を考察するにあたり、「聖書伝説のイメージを重ね合わせる技法」、すなわち「見立て」についてはしばらく置くとして、本稿では上記の構成中、作品主要部分の前半部分の描かれ方に多くしぼって、作中の中心人物である「少年」像の実体とはどのようなものであるのか追求していくことにしたい。この前半部分には、(1)「少年の汚れ」表現は何を示すのか、(2)総括される「少年」像が示すものは何か、(3)出し抜けた話者「わたし」の出現が示すものは何か、といった「少年」像について追求すべき問題点の大方が出尽くしているからである。

一、「少年の汚れ」表現は何を示すのか

作品主要部分の前半部分を小さく区分すると、翌日に閉鎖をひかえた闇市とその闇市の「ムスピ屋の女」の紹介がなされる第一部分、その「ムスピ屋」の隣りの「イワシ屋」の屋台に出現する戦災浮浪児の「少年」とその「少年」に怯える用心棒の「兵隊靴の男」をはじめとする闇市の人々が描かれる第二部分、闇市の人々が等し並びに怯える戦災浮浪児である「少年」像の総括がなされる第三部分、その浮浪児である「少年」の「ムスピ屋の女」への痴漢行為とそれとばつちりを受ける形で闇市を脱出する話者「わたし」が描かれる第四部分、闇市脱出後に話者「わたし」がこの浮浪児の「少年」にイエス像を喚起する第五部分ということになる。

この小区分に従えば、浮浪児である「少年」が作中に登場するのは、前半部分の第二部分からであるが、焼跡の闇市の「店（イワシ屋の屋台＝筆者注）の中から、いや、ほとんどひとびとの股のあひだから、外に飛び出して来たのは、一箇の少年……さう、たしかに生きてある人間とはみとめられるのだから、男女老幼の別をもつて呼ぶとすれば、ただ男のこどもといふほかないが、それを呼ぶに適切十分なる名をたれも知らないやうな生きものであった」と、まず「少年」は紹介され、そしてこれ以上に汚れようがない「汚れた存在」として、「少年」は次のように描かれている。

道ばたに捨てられたボロの土まみれに腐つたのが、ふつとなにかの精に魅入られて、すつくり立ち上つたけしきで、風にあふられながら、おのづとあるく人間のかたちの、ただ見る、溝泥の色どすぐろく、垂れさがつたボロと肌とのけじめなく、肌のうへにはさらに芥と垢とが鱗形の隈をとり、あたまから顔にかけてはえたいの

知れぬデキモノにおほはれ、そのウミの流れたのが烈日に乾きかたまつて、つんと目鼻を突き刺すまでの悪臭を放つてゐて（後略）

このようにこの上ない「汚れた存在」として描かれる「少年」とは何であろうか。ただ単に、汚れに汚れた被災浮浪児としてのみ捉えることはできないであろう。なぜならこのような記述に併せて、「少年」に対する、闇市の用心棒である「兵隊靴の男」の異様と思われる、次のような「怯え」の対応が述べられるからである。

臭いもの身知らずの市場のともがら、ものおぢしさうもない兵隊靴の男でさへそばに寄りつきえず、どら声ばかりはただけしいが、あとずさり手に手を振つて、および腰で控へるていであつたのは、むしろ兵隊靴のはうこそ通り魔の影におびえて遠吠えする臆病な犬のやうに見とれた。

そして、この怯えの何たるかの補足説明とも取れる、「兵隊靴の男」同様に「少年」に怯える、次のような闇市の人々の対応が描かれる。

まつたく、その少年が突然道のまんなかにはられたときには、あたりの店のものも、ちかくを行きずりのものも、みな一様にどきりとして、兵隊靴の男とおなじく身をかがめるふうにして、足のすくんだ恰好であつた。そして、めいめいにおもひがけないこの一様の姿勢をとらせたものは、ここにいきなり襲つて来たある強い感情のせぬだといふこと、その感情とは恐怖にほかならないといふことを、さしも狂暴なかれらの身にしても、ひたとさくらざるをえないけはひであつた。

闇市の人々は、突然あらわれた「少年」に「みな一樣にどきりと」し、「足のすくんだ恰好」の「一樣の姿勢」をとらせるのである。それは「ある強い感情のせみだ」と言い、「その感情とは恐怖にほかならない」と述べられるのである。闇市の人々の怯えの対応にこれ以上の記述は作中になく推測するほかないのであるが、「兵隊靴の男」とおなじく、「何故に闇市の人々はこのように、「少年」に対して、足のすくむような「恐怖」を持たなければならぬのであろうか。

考えるに、大人である闇市の人々も用心棒の「兵隊靴の男」も、子供であるこの焼跡の浮浪児の「少年」に体力的に「恐怖」をもつて怯える理由は何一つないのである。有るとすれば、作中で一貫して強調される二目と見られぬ「少年の汚れ」にほかならない。

続けて次のような、汚れに汚れた存在である「少年」と不潔と悪臭とにみちた闇市との対比、そしてそのような「汚れ」に対する闇市の人々の怯えが述べられる。

その虚を突いてふつと出現した少年の、きたなき、臭さ、此世ならぬまで黒光りして、不潔と悪臭とにみちたこの市場の中でもいつそみごとに目をつぼつて立つたのに、当地はえ抜きのこはいもの知らずの賤民仲間も、おもはずわが身をかへりみておのれの醜陋にぎよつとしたやうな、悲鳴に似た戦慄の波を打った。

ここに示されるのは、まさに「汚さ」の競い合いであり、「兵隊靴の男」をはじめとする闇市の人々は汚さにおいて「少年の汚さ」には足元にも及ばないことを示しているにほかならない。では、競い合われる「汚さ」とは何であろうか。特に闇市の人々に「恐怖」をもたらす「少年の汚さ」とは何であろうか。

作中、第二部分の記述に「昭和十六年ごろから」とあるように、焼跡の「不潔と悪臭とにみちた」闇市は未曾有

の大戦によってもたらされたものである。そこに吹き溜まっているしかない闇市の人々はこの大戦の大いなる犠牲者である。その犠牲者として汚れに汚れているのである。これまた、闇市に出没する浮浪児の「少年」も同様、この大戦の大いなる犠牲者として汚れに汚れた存在であらねばならない。ということは、作中に描かれる「汚れ」は単なる不潔な汚れでなく、大戦による犠牲、すなわち「時代の犠牲」を象徴するものであるということになる。

では、浮浪児の「少年」同様の、大戦の犠牲者である闇市の人々が、何故にこの「少年」に「恐怖の感情」を以て怯えなければならぬのか。前半部分・第三部分などで作中に明記されるように、「少年」の年齢は「十歳と十五歳の中ほど」と記されている。未曾有の大戦が勃発した昭和十六年において、「少年」は五歳から十歳ということになり、大戦を行つた時代に対する責任は年少の子供として皆無であり、理屈として「少年」は大戦の純粹な犠牲者ということになる。これに比し、闇市の人々は大人であるそのことによって、微小であろうとも大戦への責任は免れなく、これまた理屈であるが、大戦の純粹な犠牲者とは言えない。作中には詰めの記述は無く推測するしかないのであるが、このようなことから闇市の人々の「恐怖の感情」としての「怯え」はこの「少年」の純粹性に対する怯えと考えるのが妥当な読みと言えまいか。

以上のような点検から、闇市、その闇市の人々の「汚れ」はただ単なる汚れではなく、未曾有の大戦があつた「時代の犠牲」を象徴するものであり、そして、「少年の汚れ」の表現もただ単に、焼跡の戦災浮浪児としての「汚れ」でなく、未曾有の大戦の「純粹な犠牲」を意味するものと捉えられる。この「少年の汚れ」表現はこの作品を読み解くとき、把握しておきたい重要なポイントである。

二、総括される「少年」像について

作品主要部分の前半部分における第二部分を受けて、第三部分では、焼跡の浮浪児である「少年」の人物像の特徴が、次のような三点に総括され提示されている。

(1) 少年はふた目と見られぬボロとデキモノにも係らず、その物腰恰好は乞食のやうでもなく掻払ひのやうでもなく、また病人とも気がひともおもはれず、他のなにものとも受けとれなかつたが、次第に依つてはするぶる強盗にもひと殺しにも、他のなにものにもでもなりかねない風態であつた。

(2) しかし、ウミのあひだにうかがはれる目鼻たちはまあ尋常のはうで、ぴんと伸びた背骨の、肩のあたりの肉づきも存外健康らしく、もし、年齢をあたへるとすれば十歳と十五歳の中ほどだが、いはゆる育つさかりの、四肢の発育がいずれに約束されてゐて、まだこどもつばい柔軟なからだつきで、

(3) それが高慢なくらゐに胸を張りながら、まはりの雑鬧にはふりむかうとせず、いつたい何の騒動がおこつたのかと、ひとり涼しさうに遠くを見つめて、役者が花道に出たやうにすうとあるいて行くのは、どうしておちつきはらつたもので、よほどみづから恃むところがないと、かうしぜんには足がはこぶまいとおもはれた。

焼跡の「少年」像の特徴はまず、掲げた引用(1)が示す「風態」として提示される。「物腰恰好は——なく——な

く——ず、他のなにものとも受けとれなかつた」「次第に依つてはずぬぶん——にも——にも、他のなにものにもなりかねない」という論法で示される「風態」とはどのようなものであるか。これは単的に言つて、人間が生きるために持つ強烈な原初的エネルギー、すなわち「凶暴な生命力」とでもいったものを示す「少年」の「風態」として把握すべきものである。

この引用(1)を受け、引用(2)では「少年」像の特徴として、「存外健康らしく」「年齢をあたへるとすれば十歳と十五歳の中ほどだが、いはゆる育つさかりの、四肢の発育がいぢけずに約束されてゐて、まだこどもつばい柔軟なからだつき」であることが示され、健康な子供が持つ開かれた明るい未来が失われていないことが示されている。すなわち、焼跡の「少年」には存外、子供の持つ「開かれた明るい未来」が充分に備わっていることが確認され提示されているのである。

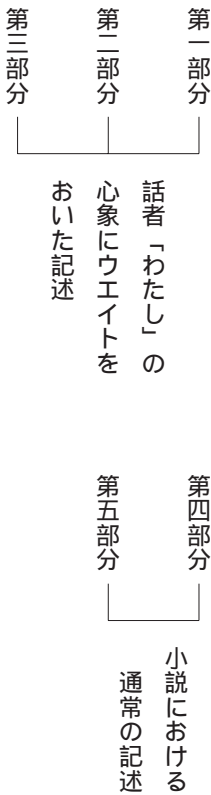
そして、引用(3)に「高慢なくらゐに胸を張りながら、まはりの雑鬧にはふりむかうとせず」「ひとり涼しさうに遠くを見つめて、役者が花道に出たやうにすうとあるいて行く」というように、「少年」はおのれの行動に何ら躊躇うことがないのである。すなわち、焼跡の「少年」には確固とした「強烈な意志力」が備わつてるのである。

以上のように、焼跡の浮浪児でありながら、「少年」の人物像はその特徴として、「凶暴な生命力」があり、「開かれた明るい未来」「強烈な意志力」が備わっていると要約され総括されているのである。前章の「少年の汚れ」同様やはり、この作品を読み解くとき、この三点に要約され総括され、提示される「少年」像の特徴は把握しておくべき、重要なポイントである。

三、話者「わたし」の出現をめぐる

ところで、作品主要部分・前半部分の第四部分において、突として話者「わたし」が出現する。作品冒頭からの話の進行からすると出し抜けという感で、「少年」の痴漢行為によって「女と少年とは一体にな」り、「もろにこちらへ、ちやうどそこに立つてゐたわたしのはうにぶつかつて来た」と描かれ出現するのである。

この突として出現する話者「わたし」によって、作品主要部分・前半部分は大きく二分される。すなわち、話者「わたし」の出現以前の第一部分から第三部分まではその実、話者「わたし」の心象を描くことに終始した記述であり、そのことを伏せて描かれた記述であるということである。そして、話者「わたし」が出現する第四部分、その「わたし」が焼跡の「少年」にイエス像を喚起する第五部分は、通常の小説における記述ということである。これを図示すると次のようになる。



第一部分から第三部分までの記述が話者「わたし」の心象にウエイトを置いたものならば、前々節、前節におい

て点検してきた焼跡の戦災浮浪児である「少年」の意味づけは話者「わたし」の心象ということになる。すなわち、「わたし」がこのようにでればよいとする「少年」像ということになる。

それは、汚れによって象徴される「時代の純粋な犠牲者」としての「少年」という意味づけであり、そのような焼跡の浮浪児でありながら困難の中を生きていく「凶暴な生命力」を持ち、「開かれた明るい未来」「強烈な意志力」が備わっている「少年」という意味づけであるということである。すなわち、「少年」について意味づけられるべしは、すべて話者「わたし」の心象によるものであるということである。

ところで、奇異なことにこの「焼跡のイエス」には、作中、「けふ昭和二十一年七月の晦日」という時や「上野のガード下」という場所は、具体的に明示され特定されているが、「少年」をはじめ、「若い女」「兵隊靴の男」「市場のともがら」というふうな人物については抽象的に記述され特定されていない。時 場所 人物を特定しないのは、ファンタジーの基本的な手法であるが、この作品においては 人物 のみを特定しないという変則的なものであるものの、その手法の使用が指摘できるのである。何故に「少年」をはじめとする作中の人物たちをこのように、抽象的な記述にとどめるのであろうか。これは取りも直さず、作中に描かれる「少年」像の意味づけが話者「わたし」の心象であるからにはかならないと言えよう。

また、三点に要約され総括される「少年」像の特徴が記述される第三部分において、これらの特徴に付記して、次のように述べられている。「もし一瞬の白昼のまほろしとして、ひよつと少年のすがたがまのあたりに掻き消えたとしても、たれもこのうへにおどろく余地はなかつたらう」と。

この世に存在していないがまさに存在して居そうなファンタジー的存在として「少年」を描くことによって、「少年」像の意味づけが、これまた、話者「わたし」の心象としてのものであることを示しているのである。

x x x x x x x

以上のように、作品主要部分・前半部分における焼跡の戦災浮浪児である「少年」を点検してきて言えることは、焼跡の「少年」像は話者「わたし」の心象によって意味づけられたものということである。すなわち、この上ない汚れによって象徴される「時代の純粋な犠牲者」としての「少年」という意味も、そのような犠牲者である浮浪児でありながら困難の中を生きていく「凶暴な生命力」を持ち、「開かれた明るい未来」と「強烈な意志力」とが備わっている「少年」という意味づけも、話者「わたし」の心象によって意味づけられたものであるということである。そのようなものとして、焼跡の「少年」はまず、作品主要部分・前半部分において描かれるのである。

であるから、迷い込んだ闇市を脱する作品主要部分・後半部分になり、「少年」についてはもう大して関心がもてなくなると、話者「わたし」にとつて「少年」は、ただ単なる闇市に巣くう野獣のごとき戦災浮浪児と成り果てるのである。

作品主要部分・前半部分の、浮浪児である「少年」が話者「わたし」によって「少年イエス」に見立てられる第五部分について、本稿では筆が及ばなかった。後日を期することにした。また、「焼跡のイエス」の作品全体の展開やその主題について、点検し論じることにも後日を期することにした。

付記 本稿における「焼跡のイエス」中の引用はすべて、『石川淳全集・第二巻』（筑摩書房 昭和三十六年四月）によった。ただし、漢字は新字体を原則とした。

二〇〇五年一月三十一日発行

編 集

筑紫女学園短期大学

紀要編集委員会

発行者

筑紫女学園短期大学

学長 高石 史人

発行所

筑紫女学園短期大学

福岡県太宰府市石坂

二丁目十二番一号

印 刷

城島印刷有限公司

福岡市中央区白金

二丁目九番六号

